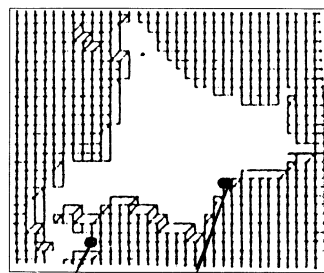


連載



しりうち しらぬか

あのマチ・地域おこし活躍中 NO.2

知内町の事例

緑の田園とゆとり・生きがい を求めた農業ビジョン

地域の概要

渡島南西部は周知のように北海道で最も開拓の歴史が古く、知内町の歴史も遠く鎌倉時代までさかのぼることが出来る。開基七八九年、自治施行二三年をかかげ、『豊かな海・山・大地にはぐくまれた〇マンと活力にあふれる町を目指して』を、シンボルテーマとして、二一世紀にむけて「自然と共存する新しい町づくり」が進められている。

知内町は函館からJR津軽海峡線に乗り、海をへだててきらめく函館山の夜景を見ながら、約一時間、青函トンネルの入り口である。

産物で意外に知られていないのが、牡蠣・ほたての養殖、珍珠はホヤ、赤かぶ干枚漬。一村一品はトマトジューズ『レッドキス』。演歌歌手・北島三郎氏の生まれ故郷でもある。

夏でも津軽海峡から吹く風の影響で冷涼、冬は暖流の影響で温暖で雪も少ない。

総面積一九七町。人口六、六八一人うち農家人口一、五八五人(二二・七%)。就業人口三、〇二六人うち農業四九人(一六・五%)である。

知内町農業の概要

知内農業の柱は水稲だが、夏冷

しるを張り、冬季温暖なことから無加温によるニラ栽培ができるのが強みで、一月末から出荷が始まり、二月から五月にかけて本格的な出荷となる。

農家戸数三八二戸のうち専業七六戸、第一種兼業九七戸、第二種兼業二〇戸。

耕地面積一、四五六ha。一戸あたり平均三・八ha。

水田面積一、一一三ha、畑三四二ha(うち牧草専用地二五二ha)、樹園地二ha。

主要作物の作付面積・家畜飼養頭数(平成四年)は図1を参照。

知内町農業発展 ビジョン策定事業

平成五年度に通産省資源エネルギー庁が所管する電源地域産業育成支援事業として、農家自らが企画し、専門家と意見を交わしながら知内町農業の二一世紀を見据えた『緑の田園とゆとり・生きがい』を求めた農業『ビジョン』を策定した。

『ビジョン』策定にあたっては農家、役場、農協、普及所から委員を編成し、専門家として道立中央農業

涼のため収量はいささか不安定である。逆に、夏冷涼・冬温暖という気候を生かした野菜作を取り入れた農業形態の比重が高まりつつある。主な農産物では米、ニラ、ホウレンソウ、トマト、ニンニク、ミツバ、カスミソウ、椎茸、変わったところでは最近評判の杜仲などがある。酪農・畜産は少なくなつたが、野菜作の増加にともない土づくりの必要性から堆肥供給などの役割も見直されてきている。

農業粗生産額は一七億四〇〇万円(平成四年度)。

道内一の「ニラ」は広葉種ニラで、癖がなく、甘みがあつて柔らかい。二月中旬にハウスのビニ

(図1)知内町・主要作物の作付面積、家畜飼養頭数(平成4年)

水 稲	787ha	たまねぎ	3ha
豆 類	49	ト マ ト	4
ばれいしょ	31	花 き	3
てんさい	3		
に ら	25	デントコーン	70ha
ほうれんそう	10	牧 草	620
だいこん	9		
アスパラガス	9	乳 用 牛	430
にんにく	6	肉 用 牛	140

試験場経営部の長尾部長、河野科長、西村研究員を招聘し、全体検討委員会および三つの専門部会で知内農業の課題整理、将来ビジョンの検討をおこなった。委員長には普及所の三上次長、副委員長には農協の和田課長、専門部会の部長には農家代表の城地、宮上、小西の三氏が就いた。

農業コンビナートビジョンをとりまとめた。平成六年度は上記ビジョン案の具体的な方向づけについて協議を進めている。委員三六名、うち農家代表委員一〇名、関係機関委員一六名である。ビジョンの具体案として三五課題七七項目が提案されているが、これらについて、将来の知内農業を担うべき若手経営者・後継者・婦人の意向を汲み取りながら、①無人ヘリによる防除システム、②野菜共選体制の強化、③生産部会組織の合理化、④広域出荷体制、⑤酪農緊急対応ヘルパー制度、⑥農地流動化促進など最重要課題の実現のための骨子計画の検討、具体的試算などに取り組んでいるところである。

地域活性化

取り組みの紹介

知内町でも高齢化、担い手不足などの課題は山積しているが、若手経営者層や大型経営農家を中心に、規模拡大や野菜作の導入・拡大の意欲も強く、パソコンを活用した経営研究グループなどの活発

な動きも頼もしいところである。以下に若手農業者を中心とした元気活動を介绍する。

(1) 農業青年フロンティア事業

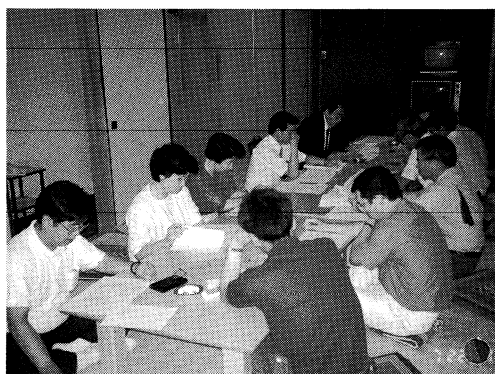
近年、農業従事者の高齢化の進行にともない、農業後継者および地域農業の担い手を確保することが重要な課題となっており、また農畜産物の市場開放などに対処し

て競争力のある農家を育成することが急務となっている。

このため、青年経営者の組織化や活動を支援するための各種事業を行っている。優れた技術・能力を有する農業の担い手を育成するため、町内で農業を営んでまだ日が浅く、農業に対する知識や技術などが十分でないなど、日々悩み続けている青年農業経営者を対象



◀ 知内町農業発展ビジョン検討委員会全体会議 平成六年七月



◀ 知内町農業発展ビジョン検討委員会・部会

に、昨年八月一九日、水稲・ミラ・ホウレンソウ・花きについて町内の優良農家四軒を講師として経営のノウハウ、栽培技術の研修を行い一〇名の青年が受講に参加した。

本年二月に外部講師を招き農業全般の講演会を開催し、全町レベルで知識の啓発を図る。さらに三月には、自分達が今抱えている問題や考え方などを直接、「町長と語る」

◀知内町「夢クラブ」検討会



べ」を計画している。

(2)グリーンカップル夢クラブ

最近ほ他産業、他町村から嫁いでくる女性が多くなっている。こうした女性（二十〜三十歳代）のご夫婦八組による「夢クラブ」では、経営や農業技術の向上を中心に、若い農業者が誇りを持てる農村景観づくりや新規Uターン就農者の仲

◀「夢クラブ」の現地活動



間づくり、更に農休日の設定によるゆとりを持って楽しめる農業の推進など、活動内容も豊富である。

夫婦同伴で活動するグループと

(レポーター・専任研究員 須田 泰行)

いつのはめずらしく、新しい農村の雰囲気づくりの場としても、各方面から注目、期待されている。

白糠町の事例

地域が新しく動きだし始める

『白糠マイペース酪農交流会』の始まり

「いままでの交流会は一度しか休んでいない。そんなにも自分はひまなのかと思う。ワミカンもマイナスにならないようだ。良すぎて不安だ」という余裕まるだしの農家もいる。また「初めて参加した。おとしから育成牛を減らし無駄な経費を減らした。乳量伸びて病気はなくなった。そこで、今年春から配合飼料を抑えた。搾乳牛一

頭に対して一日一〇キロ以上から四キロまで一気に落としたり。すると全部アルコール反応が出た」と模索状態の農家もいる。

昨年六月から始まり一二月に五回目を迎えた『白糠マイペース酪農交流会』のひとコマだ。この日は、農協・ノーサイ・普及所・町外の農家も含めて一七人が参加した。三組の夫婦も参加した。酪農

家戸数一一〇戸弱の白糠町の中では、まだまだ小さな動きでしかない。

この交流会は一九九一から九二年にまたがった農業振興計画の策定を通じて、農家有志で始まった。

新しい振興計画に

シヨック

今や酪農專業地帯と言っている



白糠町マイペース酪農交流会

白糠町は、「駒踊り」が子供たちにも伝承されている馬産や、釧路市のデパートにも並んでいる「白糠ごぼつ」など野菜産地の歴史を持つ。三つの中小河川の流域に細長い農業地帯が続いている。農協のある河口付近の市街地から農家までの距離は最高で四〇kmに達している。河川と山林に阻まれて平均成牛頭数は三〇頭であり、あまり大きくない中堅酪農家が多い。

中規模なゆえに多くの農家が高



泌乳化を進めた。とくにここ一〇年間の乳検成績は激しく向上したかつての個体乳量は根釧で一七位だったがここ三年ほどは音別に続く第一位だった(図2参照)。

ところが生産効率はずしく低下した。農協の生産物の販売金額から生産資材の購買金額を差し引いて純生産金額を出してその効率をみると、かつては釧路管内で上から数えて二位か三位だったのに、ここ三年くらいは下から数えて二三位になってしまった(図3参照)。

これらが計画策定の過程で明確になった。町内農家の三割が調査対象となり、五割が研修会に参加し、九割のアンケート分析が行われた。

農家や農協職員を含めた検討会や研修会も開かれた。①自分の能力にふさわしい飼養方法とは、②面積にふさわしい飼養頭数とは、③労働力にふさわしい規模とは、④所得を選ぶのか時間的なゆとりを選ぶのか、など様々な選択が農家に問われた。白糠の中で最も所得率の高い経営は誰で、その人は

どのような方法をとっているかも紹介された。

地域で一丸となって

振興計画の重要な推進課題は「勉強会グループ」を作ることだった。農協や普及所・役場・ノースイなどの関係機関が、その事務局的な任務を担うことであった。すでに農協に振興計画推進の専任担当者がおかれ、関係機関はテールにつくばかりとなっている。農家の交流会は出来たが、まだ自主的な活動にとどまっている。その成果はまだ未確定だ。

これからの成果に期待

「ある農家がラッピングマシンを使い始めてからローラーが重たくなり、4 駆のトラクターを買いたいと相談に来た。負債対策農家だった。新しいトラクターを買うことも一つの手段。しかし、反対にラッピングマシンを売ればどうなるか。そういう発想を持つことができた。これは大きな違いだ」と、ある農協職員は言う。「今までは何かダメだったら拡大しかなか

った」と農家はうなずいている。振興計画を作る過程で、農家にも農協職員にも考えの幅が広がったという。

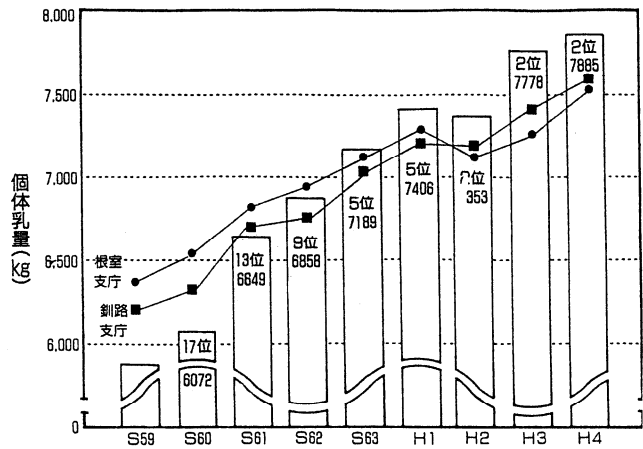
とりあえず一九九一年と九三年の三カ年などを比較すると、出荷乳量一キロ当たりの購入飼料費は三円低下し、農業支出から労賃と支払い利子を除いた経営費を販売金額から差し引いた農業所得（償却費が所得に含まれている）は、三二%から三五%へ上昇した。振興計画が練られた九一年は肉牛価格の低下などで最悪の年だった。その年との比較のため、結果は誇張されている。この成果が振興計画によって生まれたというと明らかに言い過ぎだ。

しかし、地域が新しく動き出す。そのことは大きな意味を持っている。農協の組織見直しなど課題は他にもいくつもある。振興計画の難しさは、それが出来たときから始まるといつてよいだろう。

(レポーター)

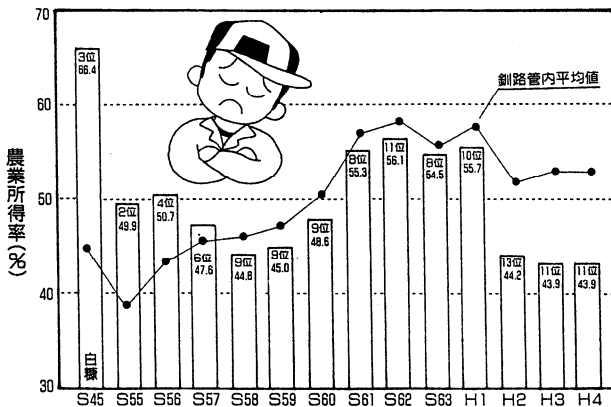
専任研究員 吉野 宣彦

(図2) 白糠町
乳検個体乳量の変化(順位は根釧乳検加入18農協に占める位置)



(資料) 社団法人 北海道乳牛検定協会「乳牛検定成績概要」各年。

(図3) 白糠町
農業所得率の変化(順位は釧路支庁13農協に占める位置)



(資料) J A 中央会釧路支所「農業・農協要覧」各年による。
(注) 農業所得を農協の販売金額から生産資材供給金額を差し引いて算出した。